

やよい図書館TOPICS

館長が紹介する「印象に残った一文」とは？

フレーズ
&
センテンス

「かき氷に、団扇の風に、打ち水。ことばもまた、人の心に涼を届けます。」

古来から続く美しいことばで季節の情景が紹介されている、この1冊。ことばの一つ一つが、四季の質感をしっかりと持てて存在していることが感じられます。万葉集の時代、樹木は「コ」と呼ばれており、夏木立（なつこだち）や木陰（こかげ）のコは、その名残なのだそうです。他にも今の季節であれば、雲の峰（くものみね）、白南風（しらはえ）、星合の空（ほしあいのそら）など、味わい深いことばが溢れています。ぜひそれのことばの意味をご覧ください。

『話したい、使いたい 心ときめくことばの12か月』山根基世／監修 KADOKAWA（青山）

「誰か×誰か」「誰か×何か」の組み合わせが面白い！

角田光代×鏡リュウジ 『12星座の恋物語』 新潮社

星占いと恋愛小説というベタな組み合わせでも、惹かれてしまうのはテレビの占いなど星占いが私たちの身边にあるからでしょうか？ 占いに興味が無くとも今日の運勢はやっぱりちょっと気になるものです。この本は角田さんによる各星座の彼、彼女についての小説と鏡さんの解説が書かれています。自分の星座の話を読んで自分自身について考えたり、身近な人を思い浮かべながらクスリとしたり…。小説として24通りの個性を楽しんでも、星占いの本として楽しんでも面白い1冊です。（坂井〈乙女座〉）



原作本から入って良し、映画から入っても良し。

Cinema
library

第16回 ナルニア国ものがたり

★原作「ライオンと魔女」著者：C. S. ルイス

★映画「ライオンと魔女」主演：ジョージー・ヘンリー、スキヤンダー・ケインズ、
アナ・ポップウェル、ウィリアム・モーリーズ

戦争を避けるために疎開したペベンシーア家の4人兄妹。ある日、4人はかくれんぼをします。ルーシーは衣装箪笥の中で雪の積もるナルニア国を見つけます。白い魔女の力で100年冬が続くナルニアに春をもたらすため、4人の兄姉は正義のライオン、アスランと共に闘います。

1950年にイギリスで出版され、今尚大人から子どもまで全世代に愛されているナルニア国物語。現在全7巻の内3巻までが映画化されています。1、2巻はペベンシーア家の4人が主人公ですが、巻が進むにつれて主人公が変わり、個性豊かな主人公たちが物語を盛り上げます。映画で注目したいのは四女ルーシーの変化。1作目から3作目まで4年の月日が経つおりルーシーを演じるジョージー・ヘンリーも14歳になり、外見もルーシーという役の心にも1作目とは違う変化が現れます。大人になっていくルーシーの姿にぜひご注目ください。

次回は「蝸の記」です。お楽しみに！（大塚）



読書の窓



次回の読書の窓は
9月号です。

その月ならではのテーマを特集。全てやよい図書館で借りられます。

7月「虹」

7月16日は「虹の日」です。人と「人」、「自然」、「心」を繋ぐ架け橋として、七色（=7716）の虹をモチーフとしているのだとか。このコーナーが、皆さんと本を繋ぐ、ステキな架け橋となりますように！

『二人が睦まじくいるためには』

吉野弘／著 童話屋

本のタイトルにある通り、2人（自分と誰か）を結ぶ作品が集められた、暖かい詩集です。中でもオススメなのが「虹の足」という作品。虹の内側にいる人は、虹に包まれている事が分からず…。虹という自然現象から、人生の真理を鋭く、そして優しく詠んだ詩です。小さなサイズの本ですので、お気軽にお読みいただけます。（新井）

『童話物語』

向山貴彦／著 幻冬舎

妖精の住む永遠の世界から人間の世界へとやってきた、妖精フィツ。彼が最初に出会ったのは意地悪な女の子ペチカでした。彼女との旅の中で、フィツは人間のことを学んでいきます。「世界は減らるべきなのか」という問いに答えるために…。物語の最後に現れる虹は、それまでの旅で出会ったすべての想いがこめられた、とても美しい光景です。（丸山）

『すごい空の見つけかた』

武田康男／写真・文 草思社

最近、空を見上げたことはありますか？ 本書には41日分の空の写真、それもなかなかお目にかかるないような「すごい空」の写真が掲載されています。さらに、その現象が起こる理由や、どうすれば見られるのかということにも言及されています。たまに忘れそうになりますが、1日として同じ空はありません。たまには、すごい空を探してみませんか？（丸山）

・『虹』

吉本 ばなな／著 幻冬舎

・『にじいろガーデン』

小川 糸／著 集英社

8月「俳句」

8月19日は「俳句の日」という、夏休み中の子ども達に俳句を親しんでもらう日です。普段俳句になじみがない人にも興味を持つてもらえるような、そんな作品をご紹介します！

『恋する俳句』

黛まどか／著 小学館

俳句をつくると聞いて、難しそう…という印象を抱いたあなたにおすすめしたいのがこの本。ごく一般の人達がつくった俳句が並んでいるのですが、そのお題が「松田聖子」「ビール」などなど、とてもユニーク！ 俳句をぐっと身近に感じるだけでなく、「自分だったらどんな俳句をつくるだろう…」と、いつの間にか創作意欲をかきたてられてしまいます。（本田）

『悪党芭蕉』

嵐山光三郎／著 宝島社

俳諧師松尾芭蕉。一部では「俳聖（俳句の聖人）」と崇められ、名前を知らない人はほとんどいないでしょう。そんな芭蕉の実像に鋭く迫ったのがこの本です。刺激的なタイトル通り、「俳聖芭蕉」というペールを取った生の松尾芭蕉は、なかなか人間臭い人物だったようです。300年以上も前に生きていた芭蕉が、なんだか身近に感じられる1冊です。（丸山）

『日本のたしなみ帖 季節のことば』

田村理恵・竹中龍太／著

様々な俳句に、ひっそりと入り込む季語。しかし皆さん、実はどの言葉がどの季節の季語か、知っているようで知らない方たち…。この本ではそもそも季語とは何なのか、から始まり、たくさんの季語を春夏秋冬に分けて説明がされています。季語を知ることで日本の自然の豊かさや、言葉の美しさを改めて感じることができます。（竹原）

・『宮沢賢治の全俳句』

石 寒太／著 飯塚書店

・『俳句がどんどん湧いてくる100の発想法』

ひらのこば／著 草思社